ほっと通信

令和6年10月号

生活の中の仏教語

誓願（せいがん）

ほっと通信編集委員　曽場 浩代

「誓願（せいがん）」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。仏教ではお馴染みなのですが、社会生活では「請う」という漢字の「請願」のほうをよく見かけます。どちらも「願い」という漢字と組み合わせられていますね。

「請う」という請願は、まさに字のとおり自分の希望する内容の達成を請うことです。国や公共団体に希望を願い出るときにも使いますね。自分の希望する内容を与えてくれるよう、あるいはしてくれるようにと何らかの「相手」に求めるものが「請願」です。叶うかどうかは神のみぞ知る。達成できるかどうかは相手次第です。

一方、「誓い」という漢字の「誓願」は、仏や菩薩があらゆる命あるものを救いたいという願いを成し遂げるために考え出した誓いの数々のことです。それも、ただ誓うのではありません。誓願の語源には、「過去に」という意味が含まれており、成し遂げることは目標であり、必ず達成されていることが前提です。

仏と菩薩が達成したい目標とは、あらゆる命あるものが救われること、つまり、「一切衆生（いっさいしゅじょう）を往生（おうじょう）させること」です。救われないものが存在する、なんてことがあるならば、仏や菩薩自身は完成された穏やかな世界、悟りの世界には行きません、という誓いを立てるのです。

浄土真宗で大切にする阿弥陀仏（あみだぶつ）は「救済」のはたらきをあらわす仏です。阿弥陀仏も修行時代の菩薩のころ、一切衆生を救いたいと願い誓いを立てました。多様な苦しみに相応し四十八種類。もちろん達成したからこそ阿弥陀仏になりました。その救ったものたちが迎え入れられるところが浄土（じょうど）です。

誓いの一つに、「苦しみを抱えたものが、私の名を呼び浄土に迎えられないようなことがあれば、私は仏にはなりません」とあります。「私の名」とは阿弥陀仏のことですから、名を呼ぶことで菩薩だったころの願いを叶えるための誓いは成し遂げられます。ですから、阿弥陀仏を大切にする仏教の宗派では「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」と名を称える念仏（ねんぶつ）を大切にしてきたのです。

苦しみを抱えた人が名を呼ばない限り誓願は達成されないのですから、どこまでも救いたい相手ファーストの姿勢がこの願いのポイントです。

他人事のようですが、仏が自分の悟りを投げ打ってでも救いたいと願い、それを達成させようとしている「相手」とは一体誰なのでしょうか。その相手こそ、あなた自身です。

日ごろは仏や菩薩のことなど考えもしません。しかし、悲しいときや辛いとき、ふと思い出して欲しいのです。あなたは願いが叶うかどうかを待つ存在ではなく、遥か昔から願われている仏の誓願を成し遂げる主役であるということを。

（１１１２字）（真宗大谷派 慈光寺衆徒、東北教務所駐在教導）